

また、関連分野への適用の可能性の見えるものとして、オープンラボでの吉原研の術前計画支援の展示が挙げられる。これまでポリゴンを処理することが多かったVRの医療応用だが、現実の医療機関ではCTやMRといった画像に基づくデータが多く、これをVRの情報として利用するためにはセグメンテーションなどの処理を行う必要があった。そこで、CTやMRなど既存の医療画像をそのまま用い、見せ方の工夫により、脳表面を露出させた表示など、自由な患部観察を可能とする本展示は、インフォームドコンセントや、画像診断、術前計画などの用途が見込め、実用の姿を期待したいものであった。

そして、VRの技術で忘れてならないのは、良い意味での「だまし」による人間への情報提示だろう。このようなものとして、雨宮氏(NTT)の「偏加速度周期運動による把持型方向誘導デバイスの開発」が挙げられる。これは、並進運動する分銅の加速度を行き帰りで変化させることにより、人間の閾値以上の部分のみで「バーチャルな力ベクトル」を知覚させるものである。小型の装置で連続的に同じ方向に力を感じられる、VR技術の原点とも言える「だまし」を実現している本発表を聞き逃がしてしまい、後悔しきりである。また機会があればぜひ聞きたいと思う。

以上とりとめもなく私の気になる発表を紹介した。最後に真鍋先生の招待講演にて「即身成仏の“即”こそがVirtualである。自分すなわち仏である。」とのお話があり、館先生も大いに感銘を受けておられた。ということで、本大会の流行語大賞は「即現実」に決定であろう(!?)。

清水紀芳

(電気通信大学)

今年度のバーチャルリアリティ大会は、9月8日から10日に京都大学にて開催された。開催前日には、台風が猛威を振るっていたため影響が心配されたが、無事に初日を迎えることができた。本大会は、六つの会場にて口頭発表・技術展示・作品展示・企業展示が行われたほか、「曼茶羅とデジタルとアナログ」という題目で、真鍋俊照氏(四国霊場第四番目大日寺住職、四国大学文学部教授)の招待講演が行われた。これらに加え、大会会場である京都大学内のVR関連研究室のオープンラボも設けられた。

また、新たな試みとして数件の発表が3Dセッションとして行われた。これは、立体視用プロジェクタと偏光メガネを使用することで聴衆に3Dコンテンツを提供す

るものであり、聴衆に対する情報提示方法の新たな可能性を感じさせるものであった。

私は初日のセッション「力覚ディスプレイ1」で「携帯型ロボティックユーザインタフェースの研究」について口頭発表を行った。今大会ではこのセッションを含め、合計35のセッションにおいて170を超える口頭発表や多数の展示が行われた。その中から私の研究に関係し興味を持ったものについて取り上げさせていただく。

「テレコミュニケーター T3の開発」(弘前大学、妻木氏ら)は双方向トレイグジスタンスを用いたウェアラブルテレコミュニケーターのシステムの提案とプロトタイプについての発表である。今回の発表では、LCDによる平面映像のみによって遠隔地の人が身近に居るという臨場感を提示していたが、ぜひコンセプトイメージのような立体映像を用いた臨場感提示の実現を期待したくなる研究であった。

また、「コイル形状記憶合金を用いた3次元形状ディスプレイ」(東京大学、仲谷氏ら)は作品展示であり、ピンアレイの各ピンロッドを形状記憶合金で駆動することによって3次元形状を提示するディスプレイである。展示物は、ピンアレイの3次元形状を保つもの、ピンロッドを高速動作させて動きのある3次元形状を提示しているものの2種あった。形状を保つディスプレイは実際に触れることができ、ピンロッドをへこませてみたところすぐに元の形状に戻り、形状記憶合金の制御が良くできていることに感心させられた。

懇親会は場所が京都というだけあり、高橋隆氏(京都高度技術研究所)による「祇園文化とVR的考察」と題した講演や、舞妓さんによる舞の披露、舞の合間の御酌や記念写真を多くの方々楽しんでいた。また同時に論文賞の授賞式も行われ、舞妓さんによってメダルが授与されるというおまけ付であった。

多くの発表や展示に加え、京都大学という場所ならではの招待講演やオープンラボ、懇親会などのイベントが設けられ、非常に充実した大会であった。



芸子さん、舞妓さんによる舞の披露(懇親会にて)